

## ■ 目指せモスクワ ～ 不思議の国の魅惑の首都

### ○ モスクワは知られざる巨大都市

6月初旬、モスクワに出かけた。この時期を選んだのは、昨年9月から同地に在留している親族の帰国が迫って来たからであるが、結果的にはベストシーズンであった。気温は温暖であり、雲ひとつない快晴が続き、木々には新緑が溢れかえっていた。地元では迷惑者の「ポプラの綿毛」が無数に浮遊していたが、これも観光客には珍しくも面白かった。

空港から市内に入る途中、反対車線が大渋滞となっていた。金曜日の夕方だったため、週末を郊外のダーチャ（別荘）で過ごす人々の車列である。以前にバカンス期のパリ郊外で同じような光景を見たが、モスクワは毎週末がこの渋滞とは、休息以上に疲れてしまうのではないかと感じた。モスクワ郊外は、新築の高層ビル、大規模ショッピング・センター、多車線の高速道路に象徴される、典型的な欧米大都市の風情であった。キリル文字の看板を別にすれば、ニューヨークやロンドンと変わるところはない。実は、モスクワ市の人口は1,000万人を超えており、第二位のパリ（800万）を凌ぐヨーロッパ最大のメガロポリスなのである。しかし、バスが市内に入ると、明らかにソ連時代の建物と思われる旧式のビルが増えてくる。その多くは国営アパートであり、平均的な広さは45平米と決して快適そうではない。しかし、その住人の多くがダーチャを持っているのが、ロシアの不思議なところである。

今回の旅では、このような「質素と華麗」、「武骨と洗練」、「無表情と満面の笑顔」など、多くの両極端を体験した。それはどこの国でも存在するのだろうが、ロシアのように極端な国は少ない気がする。しかし、旅の楽しみは「ギャップ」を体験することでもあり、ロシアほど海外旅行の醍醐味を味わえる国は無いと感じた。そこかしこにソ連時代の名残があるのも、旅行者にとっては魅力である。いずれ、ギャップは（恐らく良い方に）収束し、社会主義の痕跡も徐々に消えて行かろう。そうなれば、他の欧米先進国の大都市と何の違もない街になってしまうかもしれない。その意味で、「モスクワ未体験の人は一刻も早く訪問を」というのが、私のアドバイスである。

ホテルには9カ月ぶりに会う親族が訪ねて来たので、さっそく市内散策に出かけた。最寄りの地下鉄駅はパルチザンスカヤであったが、その名の通り、ホーム端には重厚な祖国防衛の志士（パルチザン）の銅像が置かれていた。モスクワを語るキーワードの一つは、ドイツとの「大祖国戦争」の勝利を祝う巨大モニュメント類が、今でも随所に見られることである。1944年の戦争終結から70年近くが経とうとしているのに、これほどの記憶が残っているのは、それだけ第二次大戦の攻防が苛烈を極めたからのようだ。

さて、地下鉄で真っ先に向かったのはクレムリンである。その巨大さは写真や映像で慣れていたつもりだが、実際に目にとるとやはり圧倒的なスケールである。この時期のモスクワの日没は午後10時過ぎだが、白夜の夕暮れに消えて行く聖ワシリイ寺院（世界遺産）の風情は格別であった。なお、クレムリンには大統領府もあるが、観光客相手のプーチン首相のそっくりさんがおどけていたり、レーニンをパロディにしたTシャツが売られているなど、意外なユーモア精神に驚いた。

続いて、市内最高峰（といっても標高100m）の雀が丘の展望台に向かい夜景を一望する予定であったが、歩き疲れたので瀟洒なガラス張りのカフェに入った。外観や店員のユニフォームから、明らかにフレンチかイタリアンが出てくると思ったのだが、メニューの最初の三分の一はスシで埋め尽くされていて驚愕した。今、ロシアの大都市ではスシが空前のブームだそうで、サンクトペテルブルグ出身の知人の話では、同市にはスシを供する店が300店！もあるそうだ。モスクワにはいったい何店あるのか想像も付かない。



【いつもお祭り騒ぎの雀が丘。車の上ではジャック・スパロウに扮した大道芸人が演奏中。怪しげなイラストのスシ屋の看板が、、、】

一服した後に向かった雀が丘では、モスクワ川越しにルジニキ・スタジアム（1980年のオリンピックのメイン会場として使われた旧レーニン・スタジアム）を臨み、背後には、スターリンがマンハッタンに負けじと建設した巨大なゴシック様式の摩天楼ビルの1つである、モスクワ大学本館の夜景を楽しんだ。欧米はどこでもそうだが、モスクワは特に代表的な建築物のライトアップが豪勢で、展望台からの夜景は格別なものがあつた。しかし、それも午前0時になると一斉に消灯するので、街は急に漆黒に染まる。それまで雀が丘に滞在していた我々は、地下鉄の最終に間に合うかどうか不安になり、街燈に照らされた舗装道路の先にあるユニベルシチェート（大学）駅ではなく、無謀にもより近い丘下のヴァラビョーヴィ（雀が丘）駅を目指した。しかし、斜度30度の坂は全く明かりと人影のない林道であり、今やジモティーとなっている親族の先導がなければ、とても駅に辿りつくことは出来なかっただろう（日没後のこのルートは超ウラ道であり、とても一般観光客に勧められるものではないので、くれぐれもご注意を）。なお、翌日にも同じ坂を昼間に下ったが、陽光の中を多くの人がピクニック気分歩いていて、全く別の趣であつた。また、ヴァラビョーヴィ駅はモスクワ川の上に建設されており、駅の横の歩道橋を歩いて対岸まで渡ることが出来るが、そこからの緑溢れる景色や川を渡る風の爽快感は格別であつた。同駅は前述のルジニキ・スタジアムの真横にあるが、平日は実に静かな駅である。しかし、親族の話によれば、プロサッカーの試合の夜は様相が一変し、駅から球場内まで過激なファンの怒号が轟音のように響き渡り、暴動を阻止する機動警官のトンネルを通らなければスタジアムに入れないそうだ。旅の数カ月前には、特に過激なフリーガン（多くは国粋主義者）が

コーカサス人グループと対立し、殺傷騒ぎに発展したことが日本でも話題になった。70年代、80年代のイギリスと同じように、サッカーに名を借りた人種問題の先鋭化が、今のロシアの大きな影の部分のようだ。



【モスクワ大学の威容の前でロシア女性も「はいチーズ！」】

モスクワでは繁華街のそぞろ歩きも行ったが、印象的だったのは、STING、SANTANA、COLDPLAY、KORN、LINKIN PARKなど、大物海外ミュージシャンの公演ポスターがベタベタと貼ってあったことだ。その質と量は、最近の東京を明らかに凌いでいた。ソ連時代に若者がBEATLESの海賊版を密かに回し聞きしていたというエピソードは、今では遠い昔話である。そういえば以前、親族の友人のロシア人の地方大学生に「好きな音楽は？」と聞いたところ、全てアメリカのラップ系のミュージシャンで驚いたものだ。また、ハリウッド映画も世界とリアルタイム上映されており、パイレーツ・オブ・カリビアンやカンフー・パンダの最新作のポスターを至るところで見かけた。もう一度言おう。モスクワがニューヨークやロンドンになる前に、訪問するなら今しかない！



【キリル文字でエキゾチックなハリウッド映画のポスター。これもいずれ英語に？】

## ○ ロシアの通信事情は一部で日本以上

今回、旅行中は出来るだけIT機器類から開放されたいと思い、携帯やスマートフォンの電源を入れることは控えたが、やはり最低限の連絡用には必要だったので、その利用体験をお伝えしたい。現地の親族との連絡用には、彼が自分で申し込んで用意していた、ビーライン社（3大事業者の1つ）のプリペイド式の携帯電話を利用した。ロシアでも申込書の記入時には厳しい本人確認を要するようだ。この携帯電話には、残りのチャージ金額が一定以下になると、それを知らせる連絡メールが届く。しかし、慌てる必要はない。モスクワの路上には、プリペイドのチャージ用のキオスク端末が至るところに置かれている。そこから、3大事業者であるMTS、メガフォン、ビーラインの追加チャージが可能である。操作は簡単で、携帯の電話番号を入力し、チャージ金額を選択し、その金額のルーブル紙幣を投入すると、直ぐに携帯電話に「チャージ完了」のメールが届く仕組みだ。

続いて、スマートフォンのインターネット利用だが、これには当然にWi-Fiを利用することになる。親族によれば、ロシアではファーストフード店などで無料Wi-Fiサービスが日本よりも多く存在するようだ。今回はそれを確認する時間はなかったが、シェレメチボ空港のアエロフロートの新ターミナルの中は、MTSが無料Wi-Fiを提供しており実に便利であった。成田空港では、多数の事業者が「飛行機の待ち時間だけのお得なWi-Fiプラン」を提供していたが、旅行者にとっては料金よりも事前手続きが面倒（ハードル）だと個人的には感じた。

## ○ 最後に：不思議の国ロシア

事前の予想通り、ロシアは不思議の国であった。世界のどこにも無いほどの素晴らしい建物、サービス、人々が存在する一方で、その反対の体験も出来る。ソ連時代のアパート群は地味で武骨だが、帝政時代の公の建造物は限りなく美麗である。ソ連時代の建物でも、独自のゴシック建築はそれなりに圧倒される建物である。人は基本的にとっても親切でオープンである（「北のラテン系」とも呼ばれているようだ）。街角で写真撮影を何度も頼んだが、屈み込んだり、石段の上に乗るなどして、懸命に何枚も良い写真を撮ってくれようとするので、申し訳なくなって、こちらから「もう結構です。スパシーバ！」とお願いすることが二度三度とあった。その一方で、地下鉄のトークン売り場で言葉が通じなくて往生していたところ、最後は売り場の女性から10枚のコインを投げ付けるように渡された経験もした。

どこの国にも良い面と悪い面はある。皆さんにも、ぜひともロシアの多元性を自らの目で体験して頂きたい。 [神野 新]